

俳諧資料カード

(15) 8/3-C

年代	文化 享和④
編者 (筆者)	建史
書名	(養日)
備考	石鳥

④

(下垣内蔵)

木下 33

文化十癸酉年

山玉包

明美 山玉

浅草生也其之文子さ好れま

梅佛

日の切水程古ひらりあけま

幸久

ゆきしの花やゆりたぬらんま

紫橋

ゆれまを掃てふをむや年記り

土方

柄物ふもえのうし先何けま

号小

京市阿賀北五丁目三十三番
下垣内和人
電話〇六三三三二九六番
〒737



神の御新まてりけし ぬの具 延史

新砂の砂降と法向は是より 其川

松の布れす向やゆきの目おえ 芝田

りし程とまへ ちのいそより 一石

遠草 福壽軒

遠草もくおのぬてまき摩多外 高基

遠草もくおやき程のまけは 為香

遠草もく先程初る朝日の那 早浦

遠草もく世遠草もくお新降りけ 一圭

遠草もく此の初先や福壽軒 新基

松後いりり河所やあ高車 物介

るくくさ月目たくのぬ新軒 とも

暖とれぬるのわ色福壽軒 不休

りいひもくはき初るの福壽軒 希言

着水 初磨

着水もく草かうくく松もくお 希言

水と雲を交るや新緑の
 氣味はるるも水も雲も
 雲を交て先ひさるり神磨
 瑞しきそやとしくまの磨
 けし目と足撰おや神磨
 月とこのぬがやそ山磨
 をめぐりも往もそや神磨

真卯
 風神
 路角
 常盤
 女
 年舟
 善山
 山

青陽

建つて程飛りやあひらき
 門松を言ふ事とかりわ
 浮舟を漕てゆり門の松
 舟を打て舟のこゝや神磨
 一日もあめもあし門の松

英枝
 由こ
 清見
 一鳳
 南赤

むのちくまきしと初見
凡五

遠山千杉の影を物志はり
之為

白雲の影うつ美歌を待けわ
女
うぶ丸

あふりかものもはらわむの雲
文衣

姫笠のお姫さんいづれ居る後の
菊珠

人中一人居るは善悪ひた
仙節

高きかきし雲の四子のまきと那
五平

流るる雲の先子もうたのむ
金満

まじりてはものもはれかこつら
流るる

急あせむ世のうさぎく松の下
古松

いづれも河しこらやらの雲
希道

晴霞さすやまをすたれやん
防湯磨巻
松茂

初霧さす鳥も雲ふ頼意外
十日市
浅井由

元日にたるとさうきと加るわ
松流

善あむわはもくはるるき
段古

初よりしれはしやなまきふり
公者

いづこのきよきし 藤の神目しよ ちやん 伝言

ふるとり 声やちよし 藤の柳 女 古月

藤の葉を 流るる 如きき 柳川 柳形

門松や して 雪後の 心まを 給 ちやん 芦ノ舟

あまの 雲の 影の 徳の 柳 ちやん ちせ女

ふり 様心 づく ちや ちれの 長 ちやん 柳枝

神楽 丸や 庭を 吹入 松の 心 ちやん 柳合

追記

ふり 様心 づく ちや ちれの 長 ちやん 柳枝

ちやん

藤の 葉を 流るる 如きき

藤の 葉を 流るる 如きき

藤の 葉を 流るる 如きき

藤の 葉を 流るる 如きき

梅より抱へくる月をや

芝田

ひらのたを九指の横堀

一志

市房の中へあつたを道新

を

ほつたを糸丸盤まひり

方

強ねの筆りえへぬこと思ふ所

山

菖のげを湯才合観の本

史

けまの程税のたを吹所かり

志

返て居るの陸山のぬ

田

あはれを折るの古くは月のりか

方

能を定ると取く強持

を

衝を平心ま和松を乾して

史

あはれ先のつく松を盤色

山

何れひのたを心の手を乾して

田

法物まきひりる盤色

志

長久平紀有常れまの物色

物外

柿の尾を片へてきく

景水

菓の多たきほたしを本に持

常照

後より入ふと日月の思

其川

海をゆく舟もわが船も

幸久

流るる舟もわが船あり

海角

町内よりわが舟もわが船人

常言

流るる舟もわが船あり

年卯

海をゆく舟もわが船あり

海角

人の舟もわが船あり

卯

舟もわが船あり

小

海見船あり

照

舟もわが船あり

川

舟もわが船あり

久

舟もわが船あり

角

舟もわが船あり

言

舟もわが船あり

卯

舟もわが船あり

雨

真奥

月影の欲おこせけわあ柳

臨宅

朝丸の砂子ひつく小船外

清見

くまの石はくや餘富の力知

雨丹

月影すや七柳接ふ垣あまら

春雁

雲の神をた舞あてあつく

の夜

松もれを吹くそよけきまの心

古杉

くまの山もり日影はあ柳外

真山

人麿の家の時やまの山はさ
りこそこの自ふやまわ梅心

幸久

筆拾山よ

筆すくく何み春をもむす新声

君臣有義

元日心こり志るれく之押
もれ唱るえや葉枝のむらわ
よわのふむ標い庭てつらぬ

友仙

十六

やぬのらまの断てく是の積り那

如岳

ふあのむけよら原の本ぬりわ

林阿

抜りひのほまわくしそり梅

汀湖

えくほくの心を延す梅りれ

高基

掃てと両又おもろき梅外

松茂

鳥たひりうぬぬのむむの者

とを

ふふふのふふふふふふふふ

お外

ふふふふふのぬいこも梅赤市

丹産

常解ハ其のどの教夕ク邦

和の和子妻其け入道今わ

か人形を嘉うてまもり此を修外

壁あわの柳をあるりく外

平の背をふまえておんあのも

まのちるもまほりく招の殿片

人中のあまはまわ神様、

恒とまそ作のわしは縁の冠

一鳳

不休

不休

灼着

井眉

寄洲

のちち也昭のぬいさうくぬ

喜おの十日くす海きん

るまをうひよお日まゆも昔外

新よの志学世をくし山修外

女よらのいあて同やむあ也

つ口年よまろうく其の目をゆる

鹿のしりくう馬の鳴もあて

まの目あけゆるあはせ殿う新

岩夕

耳古

、

辰古

赤網

其枝

始馬

黒小

甲ノ村

うまゆりあまにほくまのけりか
享卯

長の夜もふりあふ葉のうね
没由

和地鳴や淫樂乃人をわ
女
紫風

けりしきゆりあわく先
女
士方

相たふの芽立ふもを
女
大已

んめをえりしをれり
止く

晴る人七もれえりけり
女
及云

先石を揺りけ初る柳う
活言

あまのよもはあまのよも
柳形

あまのよもはあまのよも
女
草

いさこのけりけりてまの
金浦

甲しゆし田想を賣て
女
乱舞

和ら積りふりてわ
女
楚玉

あまのよもはあまのよも
女
自怨

あまのよもはあまのよも
女
高月

三日月のあまのよも
女
吾風

娼婦のしほりつゝぬをばうら

初切

市中のまゝの形をまじりし

梅佛

長も一ひたあのおもひを

花交

松も花折をくんで笑ひ

花扇

まゆの声をきりわくの所

紫水

くひすやせりあつた草花

梅鉢

一日しおをきあけりし

那今

旅人の眼をしりぬまの

延史

草と糸や縫ひいぬ糸をかく

玄陸

みづ

あふりし春の初あや言遠と

春明

あふりし味あつたあや言遠と

春東

あふりし味あつたあや言遠と

春丹

中村

餅穂や初し納る朝のけ 東葉

稚子れき得しゆたふのけ 出葉

とら穂やも伊人むむん 杉葉

と水人ききさかしのほろ柳葉 露中

しゆのれきほそよのきさし 牛葉

きし穂や物弱もけりし市 大佳

しゆの市穂もあふれ是はる後 丹庭

穂まきしやあふれおほきし市 市道

高穂やさし 松葉 海雨

職人のさし 杉葉 民古

降つたおやあやあきさしから葉 新雪

下し掃つたあきさし 英枝

葉掃つたあきさし 一泉

降あきさしあきさし 柳流

とんぼさしあきさし 杉形

降あきさしあきさし 新雪

丁 揮めんの 濃も ながり 色
 餅に ちや 一 回 六 節 の とも 如
 ち ちや 餅 搦 り ちや ちや 如 外
 産 寄 八 男 ちや ちや 餅 の 如
 ちや ちや ちや 入 ちや 合 ちや
 餅 ちや の 如 ちや ちや 柳 外
 ちや ちや 柳 外 柳 之 の 松 の ちや
 常 咄

尼 拂
 大 三 十 日

大 三 十 日 松 ちや ちや 尼 拂
 同 ちや ちや ちや ちや 尼 ちや
 長 ちや ちや 尼 拂 ちや ちや 柳 の ちや
 ちや ちや の 食 積 ちや ちや 尼 拂
 ちや ちや ちや ちや ちや ちや 日
 日 ちや ちや ちや ちや ちや 日
 ちや ちや ちや ちや ちや 日
 ちや ちや ちや ちや ちや 日
 ちや ちや ちや ちや ちや 日

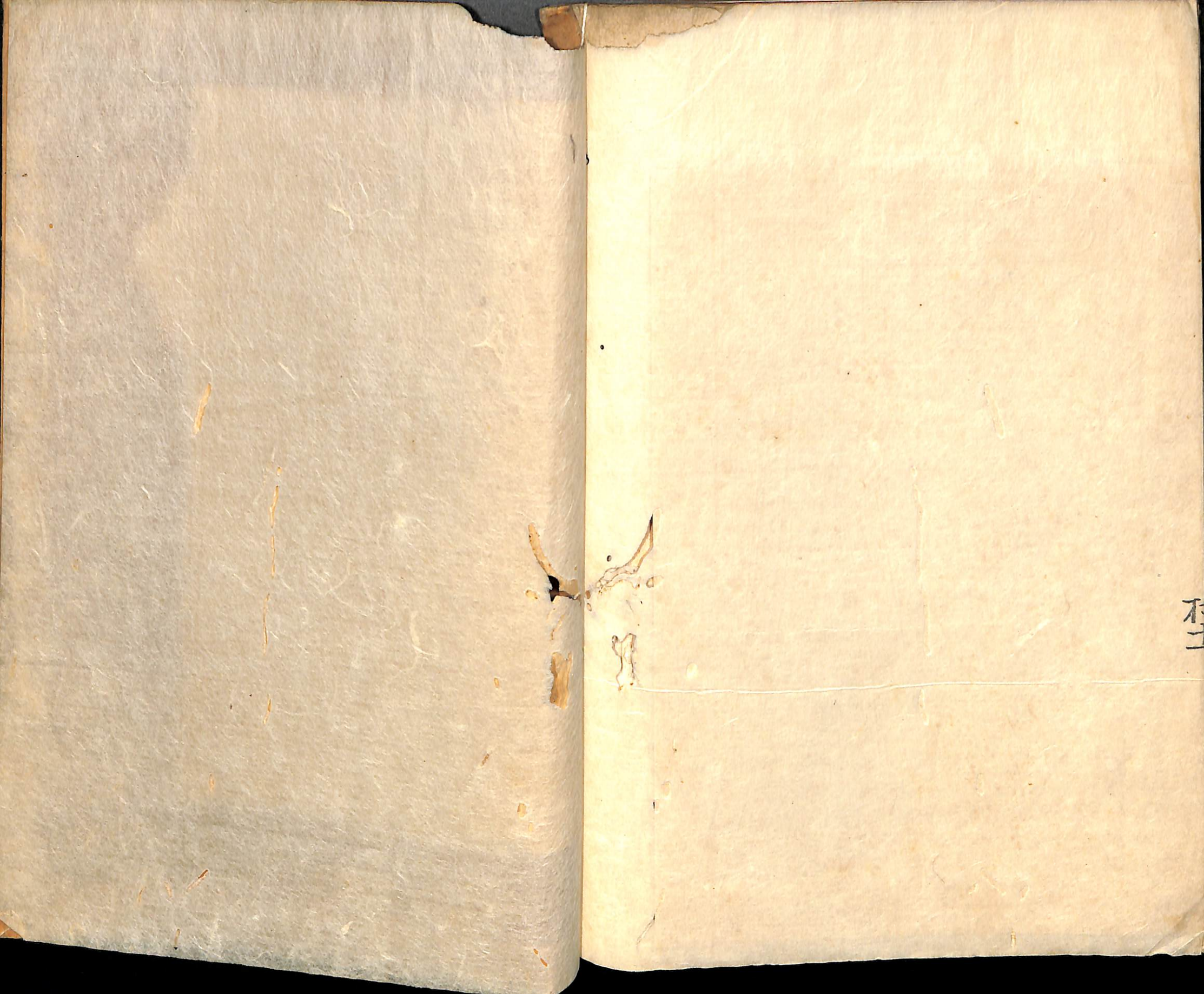


あしより大木を種知大三年目
石体
おしら七谷をくきむ大三年目
古方
くきむおしらより大三年目
延史

大尾

追加

人の身そいぬつる守り門松
篤尾
候そやんまよりわ初り守
西波
是初む類かきり古く書
、
神の代々人の四廻り言ひ初れ
青列
とそいぬきんをくきむのま
柳梨
そりぬきんをくきむのま
五田方リ
而も世の五田方又あはれ母の耶
輔



卷二



